

---

Out Of Word. あノ夏ノ日

千風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Out Of Word . あノ夏ノ日

### 【Nコード】

N6878R

### 【作者名】

千風

### 【あらすじ】

「あノ神ハキミ。」番外編。夏の終わり、年に一度の納涼祭に湧く、言ノ葉町。学校を代表して、劇をすることとなった、一年D組。主役選ばれたアヒルたちが挑戦するのは、劇は劇でも、“ヒーローショー”！？本編は完結済みです。

## あノ夏ノ日。 (1) (前書き)

どうも、千風です。

「あノ神ハキミ。」の番外編になります。

本編とは違って、アヒルたちの学校生活にスポットをあてた作品となっています。

少しでも楽しんでいただければ、幸いです。

では、どうぞ。

## あノ夏ノ日。 (1)

それは、ある夏の終わり。

すべての始まりは、明日から夏休みを控えた、一学期の終業式のホームルームでのことだった。

言ノ葉高校、一年D組。

「ああー、皆も知つての通り、夏休み最後の土日に、クソ面倒臭いことに、例年通り、言ノ葉町をあげての納涼祭が行われる」

祭りの華やかな花火の案内を片手に、どこか煩わしげな表情で説明をする、教壇の上の恵。

「ウチの学校でも毎年、催し物をやるんだが、クソ面倒臭いことに、今年はその催しをやる係りに、我が一年D組が選ばれた」

案内の紙を教壇の上に置き、恵が顔を上げ、前に座る生徒たちの方を見る。

「そこで、クソ面倒臭いが、このホームルームを使って、納涼祭の打ち合わせをする」

「ってか、面倒臭いって言い過ぎだろ」

いちいち付いている恵の言葉が気になり、大人しく自分の席に付いていたアヒルが、思わず突っ込みを入れるように言葉を落とした。

「私は、不満がすぐ、言葉に出るタイプだ」

「それでも教師かよ」

「うつせえ、トンビ」

「俺は、アヒルだ！」

恵とアヒルの言い合いを、他のクラスメイトたちは、いつものことばかりに、慣れた様子で見ている。

「とにかく、何か色々と話し合うことがあんだろ？クラス委員」

「はい」

「へ？」

恵の呼びかけに応えるようにして立ち上がったのは、アヒルのすぐ後ろの席に座っていた紺平であった。立ち上がった紺平の方を振り返り、アヒルが目を丸くする。

「紺平、おっ前、風紀委員だけじゃなくて、クラス委員までやってんのかよお？物好きだなあ」

「悪かったね。というか、今まで俺がクラス委員って、知らなかったの？ガア」

アヒルに少し呆れた視線を向けながら、紺平がアヒルの横を通り過ぎ、教室の前へと出て、少し扉の方へと避けた恵に代わり、教壇の上に立つ。教室の逆側からは、想子が前へと出て来て、紺平と共に、教壇の上へと並んだ。

「想子もクラス委員かよ」

「ええー、それでは話し合いを始めたいと思います」

物珍しそうにアヒルが見つめる中、想子が小さなノートを取り出し、話を始める。

「催しの内容は、学校から指定があり、劇を行うこととなりました。前回のホームルームで、劇の演目を決め、出演者を選ぶ投票を行ったわけですが…」

「投票なんてやったか？」

「さあ〜？」

想子の説明に疑問を持ったアヒルが、横の席に座る保へと問いかけると、保が大きく首を傾げる。

「はあ〜！こんな何の取柄もない俺が、せつかくのアヒルさんの問いかけに、答えられなくてすみませ〜ん！」

「うつさい！」

「ひい〜！こんな普段から迷惑極まりない俺が、ホームルームの邪魔までしちゃって、すみませ〜ん！」

アヒルへと謝り散らしていた保に、想子が思わず怒鳴りつけると、保はさらに謝り散らし、想子はまた、大きく表情を歪めた。

「あんたらが団体で、一週間も休んでた時のホームルームでやった

のよ！わかった！？」

「ああ、そういうことか」

想子の言葉に、納得したように頷くアヒル。最近、五十音士関連のことで特に、学校を休むことが多かったため、その間にことが進んでいても、何らおかしくはない。

「じゃあ早速、投票で決まった、劇出演者を発表したいと思います」  
アヒルと保のせいで、すっかり不機嫌になってしまった想子に代わり、紺平は落ち着いた様子で淡々と、話を続ける。

「出演者は、朝比奈君、神月君、真田さん、高市君、奈々瀬さんの五人に決まりました」

「はっ？」

紺平からの発表に、思わず間の抜けた声を発するアヒル。

「ちよつと待て！決まりましたって、何だよ！？それ！」

「ガア、ダントツ一位で選抜入りだよ。凄いね」

「んな一位、いらねえよ！」

投票結果を見せてくる紺平に、アヒルが思わず立ち上がって抗議する。

「どうせ、その時居なかった俺らに、皆で面倒なこと、押しつけたとか、そういう感じだろうが！」

「いいじゃない？あんた、声デカイし、舞台映えるわよ。きつと」

「いいわけあるかぁ！んな全員揃っても居なかった時の選挙なんて、無効だ、無効！」

想子の無責任な発言に、アヒルがさらに怒鳴りあげる。

「なあ！？お前等だって、劇なんて嫌で…！」

『神月くん、頑張つてえ〜！』

「任せておいて下さい。僕が素晴らしい演技を、皆さんにお見せしますよ」

アヒルが教室の後方を振り返ると、一番後方の席では、箆也が、黄色い声援をあげる女子生徒に、満面の爽やかな笑顔を向けていた。  
「舞台だなんて、腕が鳴るわね…フッフ…」

「えええ！？こ、こんな俺なんかが、皆さんを代表して舞台なんて出ちゃっていいんですかあ！？」

「ぶ、舞台のヒ、ヒロインで…朝比奈くんが相手役なんて、そ、そんなのっ…緊張しちゃうなあ」

「……………」

女子生徒に笑顔で応えている籠也だけでなく、囁、保、七架の三人も、それぞれ反応は異なるが皆、やる気は満々の様子であった。そんな仲間たちの様子に、アヒルが思わず固まる。

「じゃ、アヒル以外は皆、賛成つてことで、多数決により、このメンバーで決定ねえ」

「そ、そんな…」

これが、すべての始まりであった。

八月中旬。言ノ葉高校、体育館。

「あ、ここで会ったが百年目ええ〜！」

体育館の舞台の上で、その大きな声を張り上げているのは、派手なりーゼント頭にサングラス、裾の長い学ラン姿の男、アニキこと、守であった。いつもよりも大きな身振り、手振りを見せる守は、いつもの数十倍、煩わしい。

「今日という今日こそ、コッテンパンのパンの耳にしてやるう〜！」

『よ、アニキ！』

守の後方から、嬉しそうに声をかける、色取り取り、形様々な頭をした、守のいつもの子分たち。

「さ、ここでヒーロー登場よ！」

舞台の下から、舞台を見上げている想子が、メガホンで声を出し、まるで監督のように、指示を送る。舞台袖で構えていた生徒が、ラジカセのスイッチを入れ、ノリのいい音楽が流れ始めると、同じく舞台の袖から、アヒルたち五人が、舞台上へと現れた。

「キュートな視線に、クツギづけ！桃色プリティパワー、コトノハピンク！」

少し恥ずかしそうにしながらも、完璧な言い回しとポーシングを決める七架。

「大好物はカレーです！黄色い閃光ビッリビリパワー、コトノハイエロー！」

七架に続いて、どこかノリノリでポーズを決める保。

「漆黒の闇へあなたを誘う…すべてを呑み込む黒色パワー、コトノハブラック…フフフ…」

背後に黒い闇が見えそうなほどに、不気味に登場する囁。

「時に静かに、時に荒々しく、深き清流、青色パワー、コトノハブルー！」

『きゃあああ！神月クン！』

クールに、格好付けた様子で箆也が現れると、舞台下で見ていた女子生徒たちから、歓声があがる。

「ああ、ええっと」

四人に続き、アヒルが舞台の中央へとやって来る。

「も、燃え盛る…何だっけ？情熱？何とかかんとかの赤色パワーは、ええーっと」

「カット、カット、カットおお！」

アヒルが言葉に詰まっていたその時、舞台下の想子が大きく手を叩き、舞台上の皆へと声が掛かった。皆が演技を止め、想子へと視線を集める。

「ふう〜」

集まった視線を確認しつつも、メガホンをすぐ横の机の上へと置き、どこか困った様子で頭を抱える想子。想子が顔を上げ、まっすぐにアヒルの方を見る。

「下手クソ」

「うつせえなあ！」

シンプルな言葉に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「正直、僕も、いくら何でも下手過ぎだと思っぞ。神」

「ええ…正直、ね…フフ…」

「あのぉ、すみません。アヒルさん、俺も正直、ひど過ぎるか…」

「ごめんね、朝比奈くん。わ、わたしも正直…」

「正直正直、うっせえなあ！」

想子に続き、口々に言う仲間たちに、さらに表情をしかめるアヒル。

「そっだ！俺のこの、素晴らしい演技をちったあ見習え、朝比奈！」

「お前のどこに、演技が必要なんだよ」

偉そうに言い放つ守に、アヒルが鋭く言い返す。

「だいたい何で、安二木たちが出てんだよ？」

「催しは隣校と合同で行うのが、決まりなんですって…それで今年は、向こうも一年D組が代表で…」

「それが、あいつ等のクラスだったというわけか」

「すっごい縁だね」

囁と箆也の言葉を聞き、七架が感心した様子で呟く。

「ったく、タヌキでも、もうちょっとマシな演技するわよ？あんた、本当に人としての進化をしてきたわけ？」

「うっせえなあ、俺は演技とか、そういうの苦手なんだよ！だから、劇に出るなんて嫌だっつったのに」

怒鳴りあげたアヒルが、不貞腐れた様子で、舞台上に座り込む。

「だいたい、何だって、祭りの催しがヒーローショーなんだよ？劇っつったら普通、桃太郎とかだろうが」

「それは…」

「それは、ヒーローショーこそが、すべての人の心を揺さぶるもの！誰の心にも強い、感動を生むものだからだよあ！」

アヒルの問いかけに答えようとした想子の言葉を遮り、舞台俳優並みに声を響かせて、その場へと現れたのは、黒い眼鏡を掛けた、少し地味な見た目の、一人の男子生徒だった。男子生徒は、踊るような軽い足取りで、想子のすぐ横までやって来る。

「誰だ？」

「同じクラスでしょ」

こっそりと問いかけるアヒルに、想子が呆れた視線を向ける。

「僕こそが、今回のこの“コトノハレンジャー”の脚本兼演出を手掛けた、小花司綴おはなつかずだよ、朝比奈君！」

大きく両手を広げ、綴が、アヒルへと堂々と名を名乗る。

「自分で言うのも何だが、この話は、相当に面白く、素晴らしい出来に仕上がったんだよお！」

「そうか…？」

舞台の上に置いてあった台本を取り、パラパラを見送りながら、アヒルが思わず声を漏らす。

「まあ、出演者の希望があったとかで、イエローとブラックの性別を、入れ替えたりもしたんだけどねえ」

「フフフ…だって、暗闇のブラックって、私にピッタリなんだもの…」

「はあ〜！こんな大して好かれてない俺が、国民皆に愛されてるカラーを大好きな、イエローレンジャー役ですみませ〜ん！」

綴の言葉に、囁が不気味に微笑み、保がいつものように謝り散らす。

「入れ替えなんて、些細なことさ。そんなものでは揺るがないほどに、僕の作品は素晴らしい」

「凄い自信だね」

「ある意味、感心だな」

自分に酔っているかのようなあ綴の言葉に、籠也と七架が、どこか呆れた視線を向ける。

「だが、僕の何者も寄せ付けない、素晴らしいこの作品を、今まさに、揺るがすほどに邪魔をしているもの…それが君だ！朝比奈君！」  
「うえ？」

綴に勢いよく指差され、アヒルが少し焦ったように声をあげる。

「コトノハレッドは、五人のヒーローのリーダー！この話の主役だ

！」

綴の言葉に、さらに熱が入る。

「そのレッドである君が、こんな状態では、いくら他の皆がいい演技をしても、すべてが締まらず、この作品はブチ壊しになってしまう！」

「だったら、他の奴がレッドやればいいだろ？」

熱の入る綴とは対照的に、とても冷めた様子で言葉を返すアヒル。  
「何回も言っけど、俺、演技とかこういうのって、向いてねえんだって」

「むうう」

アヒルのやる気のない発言を聞いた綴が、腕組みをし、考え込むように首を捻る。

「まあ、そうだな。まだ時間もあることだし、もう少しマシな人間と配役を代えても……」

「レッドが降りるなら、僕も降りる」

「へ？」

「はあ！？」

簞也の思いがけない発言に、アヒルと綴がそれぞれ、驚きの声をあげる。

「いい感じで交代出来そうだったのに、な、何言ってくれちゃってんだよ！？簞也！」

「例え、舞台の上だけであっても、僕は、あなた以外の後ろに附く気はない」

「はああ？」

はつきりと言い放つ簞也に、アヒルが理解し難い様子で、強く眉間に皺を寄せる。

「そうね……私も、アヒルんが出ないなら、降りようかしら……つまりらないし」

「お、俺、アヒルさんと劇、出たいです！はあ！こんな俺が、偉そうにすみません！」

「わ、私も出来れば、朝比奈くんと一緒にいっていうか、その……」

「おいおい、お前等……」

箆也の意見に同意していく皆に、アヒルが益々、困り顔となっていく。

「うーん、何故かは知らないが、皆からの信頼は絶大のようだね」他の四人の様子を見て、綴が感心したように言う。

「うんうん、コトノハレッドに一番必要なものは、その信頼だ！君をレッド役で続行しよう、朝比奈君！」

「えええ！？」

また力強くアヒルを指差す綴に、アヒルが困った様子で声をあげる。

「ちょ、ちょっと待てよ！俺は……！」

「神」

綴への説得を続けようとしたアヒルが、箆也からの声に呼び止められ、振り返る。

「“諦める”のか？」

「……！」

箆也からのシンプルな問いかけに、大きく目を見開くアヒル。アヒルが少し考えるように俯いた後、勢いよく顔を上げ、舞台の上で立ち上がる。

「よっしゃあ！やってやろうじゃねえかあ！」

「その気合いこそが、レッドだよ！朝比奈君！」

アヒルの勢いある叫び声に、綴が少し、興奮した様子で声をあげる。

「これから本番へ向け、毎日、練習をしていこう！」

「おうよお！」

「……単純」

綴の言葉に、迷うことなく返事をする、すっかりやる気満々となったアヒルを見て、想子がどこか呆れた様子で肩を落とす。

「毎日つて、人をどんだけ、休日出勤させる気だよ。あいつ等  
少し離れた場所で一連の様子を見ていた恵が、困ったように溜息  
を吐いた。

## あノ夏ノ日。 (2)

そんなこんなで、暑い夏の中、練習の日々は続き、そして夏の終わり。納涼祭、当日がやって来た。

言ノ葉広場の中央に設置された高台の上には、和太鼓が置かれ、白い鉢巻を頭に巻きつけた言ノ葉高校の校長が、気持ち良さそうにバチを振るっている。高台から伸ばされた飾りは、広場全体に広がっており、提灯の明かりも色取り取りで美しい。広場には、いつもは商店街などで店を出している者たちが、屋台を広げ、訪れた人々を迎え入れていた。

「結構、賑わうものだな」

「ま、この町にとっちゃ、一年で一番のイベントだからな」

感心したように周囲を見回す箆也に、アヒルが団扇を扇ぎながら、笑顔で応える。箆也や囁、保にとっては物珍しいことのようなが、生まれた時からこの町に居るアヒルにとっては、もう見慣れた光景であった。

「私たちがヒーローショーをする舞台は、どこにあるの…?」

「広場の一番奥に、特設ステージがあるだろ?あそこだ」

「楽しみだねえ」

「俺はちよつと、緊張します」

アヒルが指差した先に見える、大きなステージ。今は小学校の子供たちが、合唱を披露しており、観客席は、子供たちの保護者でいっぱいになっている。実際のステージを前に、保はどこか固い表情となっていた。

「はあ〜!こんな緩みきつた性格の俺が、一丁前に緊張とかしちゃって、すみませえ〜ん!」

「ハイハイ」

謝り散らす保を、慣れた様子であしらうアヒル。

「演技の方は、大丈夫なのか？神」

「ううーん。まあ、練習は出来るだけしたし、後は何とかなんだろう」

「あ、朝比奈クウーン」

「へ？」

適当に広場を回っていたアヒルたちが、聞き慣れた声に呼び止められ、人ごみの中、その足を止める。

「扇子野郎、雅さんも」

「どうも」

アヒルたちが振り返ると、大きく『いどばた』と書かれた屋台の下に、為介と雅の姿があつた。為介は扇子を扇ぎながら、逆の手で、アヒルたちへと手を振っている。その横で、雅が丁寧に、皆へと頭を下げる。

「扇子野郎たちも、屋台出してたのか」

「寄つてかなあゝい？一回、百円だよお？」

為介たちの居る屋台の方へと、歩み寄っていくアヒル。為介たちの前には、大きな水槽が置かれており、為介が小さなお椀と、金魚すくい用の網を差し出しながら、勧誘を行う。

「へえゝ、金魚すくいかあ」

懐かしそうに微笑みながら、アヒルが水槽の前へとしゃがみ込む。  
「うううゝんゝ」

そのアヒルの言葉を否定するように、大きく首を横に振る為介。

「“何でもすくい”」

「ぎゃあああ！」

為介の言葉を合図にするように、突然、水槽から飛び出してきた巨大ダコに、アヒルが思いきり叫び声をあげて、後方へと体を傾かせ、地面へと尻をつく。その間に、タコは水槽の中へと戻っていく。  
「どお？面白いでしょゝ？」

「面白くないわあ！つてか絶対、んな小さな網で、今のタコ、すぐえねえし！」

緩い笑顔で問いかける為介に、アヒルが立ち上がりながら、必死

に怒鳴りあげる。

「見事にタコをすくった人には、コレ！“恋盲腸” ヒトミのスペシャルラブ枕をプレゼントだよ〜」

「何…！？」

ピンク色の枕を取り出して宣伝する為介に、まったく興味を示さないアヒルの横で、冷静だった簞也がすぐにその顔色を変える。

「一回、頼む」

「はい、どうぞ」

簞也から百円を受け取り、その代わりに網を差し出す雅。

「おいおい、やめとけて。その小っさい網じゃ、絶対すくえないぜ？」

「ヒトミのためだ。絶対にすくってみせる」

「フッフ…熱いわね…」

「はあ…」

ギリギリに瞳を輝かせ、大きな水槽の前にしゃがみ込み、小さな網片手に、巨大タコに挑む簞也を見て、アヒルがどこか呆れたように肩を落とす。

「俺も俺も！一回、お願いしまあーす！」

「スー兄！」

どこからか突然、屋台へと現れたスズメが、素早く雅に百円を渡し、奪い去るように網を貰って、水槽の前へと陣取る。

「お前に、スペシャルラブ枕はやらねえぜ。簞也」

「僕だつて譲る気はありませんよ、スズメさん」

「真剣になりすぎだつての」

水槽の前で火花を散らせる簞也とスズメに、アヒルが益々、呆れ顔となる。

「つてか、スー兄はなんで、ここに…」

「ある夏の夜、町で行われる祭りに行くため、少女は一人、暗い山道を走っていました…」

「ん？」

いきなり現れたスズメを不思議に思い、首を傾げていたアヒルの耳に、どこからともなく、不気味な声が入って来る。

「少女が走ることに疲れ、ふと足を止めたその時、少女の背後から近づく、一つの足音…」

その不気味な声が語る話に、いつの間にか聞き入り、アヒルがごくりと、唾を呑み込みながら、その続きを待つ。

「少女が恐る恐る、後ろを振り返ると、そこには…」

「そ、そこには…？」

アヒルが言葉を繰り返し、険しい表情を見せる。

「四つ目スカンクが…」

「スカンク！」

「ぎゃああああ！」

大きな声と共に、背中から勢いよく両肩を掴まれ、アヒルが背筋を震え上がらせ、激しい悲鳴をあげる。

「為介さん…」

「ごめんごめん、つい、やりたくなっちゃってえ…」

アヒルの背中から肩を掴み、大きな声をあげた張本人である為介が、雅に注意するような鋭い視線を向けられ、緩い笑顔のまま、謝る。

「どう…？少しは涼しくなった…？アヒルくん…」

「ツー兄…」

まだ早い鼓動を静めるように、必死に胸を押さえたアヒルが、名を呼びながら、横を振り向く。そこにはアヒルのもう一人の兄、ツバメが立っていた。

「ついでに、緊張も取ってあげようと思ってね…」

「あ、ありがとうよ…」

何故か得意げに微笑むツバメに、怒鳴る気力もなく、アヒルは大人しく礼を呟く。

「ってか、なんでツー兄までここに…」

「スーくんもツーくんも、ちゃんと手伝ってよぉ〜！」

「んあ？」

もう一つの聞き覚えのある声が、そこに響き、アヒルが為介たちの屋台の、すぐ横の屋台へと、視線を動かす。

「お、オヤジ!？」

「あ、アーくうくん！」

為介たちの隣の屋台で、店頭に立っているのは、いつもの店のエプロンに、白い鉢巻姿のウズラであった。ウズラはアヒルを見つけ、嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。よく見れば、ウズラの居る屋台には、大きく『八百屋あさひな』と書かれていた。

「うちも屋台、出してたのか」

「うん、商店街のお店は、だいたい出すからねえ」

アヒルが数歩、足を動かし、ウズラの居る屋台へと移動していく。

「じゃあ、スー兄とツー兄は手伝いで、ここに居たのか」

「そうそう、アーくんは劇で忙しいだろうから、二人にお手伝い、

お願いしたんだけど、二人とも、全然やる気なくてさあ」

「だって、つまんねえんだもん」

嘆く父に対し、タコすくいを続けながら、スズメが口を尖らせる。

「そうそう、それに絶対、売れないと思うんだよね」

スズメの言葉に同意しながら、ツバメが鋭く、店頭を見つめる。

「“チヨコきゆうり”って」

「えええ、お父さんの自信作だよあ？」

ツバメが見つめた店頭には、チヨコとチヨコチップで彩られたきゆうりが、一本丸々串に刺さり、それが何本も並んでいた。

「チヨ、チヨコきゆうり…」

「確かに絶対、売れなさそうね…フフフ…」

その光景を見て、思わず表情を引きつるアヒルの横で、囁が不気味に微笑む。

「じゃあ、これはどうかなあ？綿レタス！」

明るい笑顔で、ウズラが奥から取り出してきたのは、淡いピンク色の綿あめを纏った、レタス丸一個であった。それを見て、兄弟た

ちがまた、表情を引きつる。

『絶対、売れない』

「えええ〜？」

声を揃えるアヒルたちに、がっかりした様子で肩を落とすウズラ。  
「そういえばアヒルくん、アヒルくんたちの出る劇って、何時から？」

「三時。そろそろ一時間前だから、準備行かねえとなあ」

ツバメの問いに答えながら、アヒルが腕時計を確認する。

「劇の主役とかお前、本当に大丈夫なのかあ？」

まだタコすくいを続けながら、スズメが少し顔をしかめ、アヒルへと言葉を向ける。

「あんまし恥かくなよあ？俺の弟であるお前がへマすると、俺に夢見る女子たちがっかりするからよ」

「どこに、んな夢見る女子がいんだよ」

「僕も、居ないと思う…」

得意げに話すスズメに対し、鋭く言い放つアヒルと、それに強く同意するツバメ。

「アーくん、アーくん！」

「ああ？」

どこかウキウキとしたウズラの声に呼ばれ、アヒルが少し面倒臭そうに振り向く。

「何…」

「じゃーん！お父さん、この日のために、お手製のアーくん応援幕を作ってきたんだあ〜！」

「……………」

笑顔の父が翻した、屋台よりも幅のある巨大な応援幕と、それに書かれた“アーくん、頑張つて”の文字に、アヒルが一瞬にして、その表情を凍りつかせる。

「作るのに、八日もかかったよあ〜どう？アーくん、気に入る…」

「次にその幕を出したら、親子の縁を切る」

「えええ！？」

冷たく言葉を放つアヒルに、焦ったように声をあげるウズラ。

「さ、とつと準備行くぞ」

「な、なんでえゝ！？お父さん、頑張つて作つたのに！アーくゝん！」

問いかける父を置いて、アヒルは囁や七架と共に、足早にその場を去っていく。

「やつぱり、アーくんの文字を、金糸で刺しゅうした方が良かったかなあゝ？」

「そういう問題じゃないと思うよ……」

「やれやれ、だなあ」

お手製応援幕を見ながら、あれこれと考えを巡らせている父を見て、深々と肩を落とすスズメとツバメであつた。

「んんゝ、ここが特設ステージか」

アヒルたちが為介やウズラの屋台を回っている頃、アヒルたちの出演する劇の脚本兼演出を手掛けた綴は、劇の行われる舞台を確認するため一人、まだ客も集まっていないステージを訪れていた。

「僕の素敵な物語が繰り広げられる舞台にしては、地味めだが、まあいいとするか」

味気ないステージに少し首を捻りながらも、綴が納得するように頷き、ステージに背を向ける。

「さて、朝比奈君の台詞回しの、最終確認にでも行つ……」

「聞いたかあ？今年の劇」

「ん？」

その場を去ろうとした綴のもとに、若い男の声が入って来る。その声のした方を綴が振り向くと、舞台の袖で、三名の若い男がそれ

それ作業をしていた。納涼祭のスタッフであろう。目立った黄色の法被を着ている。

「ヒーローショーらしいぜ」

「まじでえ！？だっせ！」

「高校生が、団体でよくやるよなあ」

聞こえてくるその言葉に、綴の表情が一気に曇る。

「俺、さっき練習見てただけど、まったベタな展開でさあ、あれなら幼稚園の学芸会の方が、まだマシだぜ？」

「げえ、んなんで、客入んのかよ」

「折角、苦労してステージ作ってんだから、せめて見るに耐えるもん、やってほしいよなあ」

「……！」

それ以上、男たちの言葉を聞いていたくなく、綴は思わず、弾かれるように、その場から駆け出した。

「ハア…ハア…！」

逃げるように必死に足を動かし、頭を巡る、先程の言葉たちを掻き消すように、綴が何度も何度も、首を横に振る。

「違う、違う…！ば、僕は…！」

——ヒーローショーこそ、すべての人の心を揺さぶるもの——

「僕は…！」

自分自身の放った言葉を思い出し、その言葉だけを信じようと、綴が強く、瞳を閉じる。

<傷ついた…？>

「え…？」

どこからともなく響く声に、綴が必死に動かしていた足を止め、その場で立ち止まる。

「な、何っ…」

響く声が誰のものなのかを確かめようと、綴は周囲を見回すが、

そこは人気のない祭りの裏手で、綴以外、人影は見当たらなかった。

「そ、空耳…」

<ねえ、傷ついたの…?>

「……っ」

聞き間違えかと思うとしたその時、また、声が響く。

「だ、誰…」

<頂戴>

「う…!」

戸惑っていた綴のすぐ目の前に、上空から、黒い影の塊が降り立つ。見たこともない生き物の姿に、綴は背筋を震え上がらせ、一歩、足を退いた。

<ねえ、その痛み…頂戴>

「う、うああああ!」

伸びる黒い影の手に、綴の叫び声が響いた。

## あノ夏ノ日。 (3)

特設ステージ裏、出演者控えテント内。

「劇はいいとしても、この衣装で、商店街や学校の皆の前に出んのかあ……」

自身の纏った格好を見下ろしながら、どこか憂鬱そうに呟くアヒル。そのアヒルが身につけているのは、全身真っ赤な、いわゆるヒールスーツであった。両肩からは、赤いマントを翻し、胸のところに、コトノハレンジャーであるからか、『コ』の文字が大きく刻まれている。

「はあ〜！こんな地味が服着て歩いてるような俺が、明るい黄色スーツなんか着ちゃって、すみませ〜ん！」

「静かにしろ。今、どうやってあのタコをすくうか、シュミレーシヨンをしているんだ」

「フフフ…楽しそうね…」

「何かちよつと、可愛いなあ〜」

アヒル以外の四人も、それぞれのレンジャーの色のスーツを纏い、すっかり準備を整えていた。アヒルたち男性陣と、基本のデザインは同じだが、下だけ短いスカートになっているピンクのスーツを纏い、七架は照れながらも、どこか嬉しそうな表情を見せている。

「男前だよ、ガア」

「うつせえ」

茶化すように言う紺平に、アヒルが少し顔をしかめる。

「おっかしいわねえ」

テントの入口から聞こえてくる声に、アヒルと紺平が同時に振り向く。声に少し遅れるようにして、テントの中へと入ってきたのは、想子であった。首を捻り、どこか気難しそうな表情を見せている。

「どうしたの？想ちゃん」

「来ないのよ、小花司が」

「綴が？」

「ええ」

聞き返したアヒルに、想子が短く頷く。

「開演まで後五分だったのに、来ないつもりかしら？」

「あんなに力入れてたんだし、それはないんじゃない？先に舞台の方、行ってるのか」

「うーん。朝会った時は、最後に皆に気合い入れるんだって、張り切ってたんだけどなあ」

「出演者の皆さん、スタンバイ、お願いします！」

「あ、はい！」

紺平の言葉に納得しきれず、さらに首を捻らせていた想子が、テントの外から響く、納涼祭のスタッフのものとされる声に答える。  
「ま、とりあえず、小花司のことは置いといて、ついに本番なんだから、しっかりね！」

「じゃあ、俺と想ちゃんは、舞台横に行ってるから」

「おう！」

足早に去っていく想子と紺平を、アヒルが大きく右手を振り上げ、見送る。二人がテントから去ると、テント内は、アヒルたち五人だけとなった。開演まで、残りわずか。アヒルたちもまた、舞台袖へと出向かねばならない。

「さてと」

アヒルが振り上げていた右手を下ろし、改めるように言って、筆也たち四人の方を見る。

「ま、今回は別に、言葉を守るってわけでも、戦うってわけでもねえけど」

穏やかな笑みを見せたアヒルが、四人の顔を、一人ひとり、見回していく。

「けど、言葉で皆を楽しませるっていうのも、音士の役目としてはアリなんじゃねえかなって、俺は思う！」

晴れやかな笑みを浮かべ、迷うことなく、その言葉を紡ぐアヒル。

「だから、今日も思いつきり行こう！安団！」  
あだん

『仰せのままに、我が神！』

アヒルのその言葉に、四人も笑顔で、大きく頷いた。

くだだいまより、言ノ葉高校一年D組の皆さんによります、ヒーローショー『コトノハレンジャー』の上演を行います。皆さまどうぞ、お静かにご覧下さいませ>

女性スタッフのアナウンスが入り、特設ステージ上に設けられたライトが、一斉に点灯される。準備の時には、誰も居なかった観客席も、今は満員で、空いている椅子を見つけることが困難なほどだ。

「ああ、緊張してきた」

「親父が緊張して、どうすんだよ」

しっかりと前方の席に陣取ったウズラが、どこか苦しげに胸を抱えると、その横に座っているスズメが、呆れた表情で突っ込みを入れる。

「あ、誰か出て来たよ…」

スズメの横に座るツバメの言葉に、ウズラとスズメは素早く振り向き、その視線を、舞台上へと集中させた。

「俺は、邪悪言語団の兄貴、アニキックス！」

舞台の照明に照らされ、その舞台の上へと、一番に出てきたのは、アニキこと、守であった。肩に鋭つい角のついた、赤と黒の派手な衣装を身に纏っているが、リーゼントとサングラスの姿は、相変わらずである。

「今日も人間共の言葉を、これ以上ないくらい、邪悪なものへと変えてやるぜえ！」

『きゃあああぁー！』

守が両手を振り上げると、いつの間にか舞台上へと現れた、普通の村娘のような格好をした、数名の女生徒が、怯えるような悲鳴をあげ、その場にしゃがみ込む。

「何よ、あんたなんか!」

「あんたこそ、何よ!」

「あんたたち、どっちもウザいのよ!」

しゃがみ込んでいた女生徒たちは、少しの間を置いてすぐに立ち上がり、立ち上がったかと思うと、突然、その様子を変え、激しい剣幕となつて、互いを罵り合う。

「何よ!」

「何なのよ!」

「フッフッフ!」

どんどんと激しさを増していく女生徒たちの争いを見て、不気味、というよりは、ただ単に気持ちの悪い笑みを浮かべる守。

「素晴らしい! 邪悪こそ、我が言葉だあ!」

『よ、アニキ!』

舞台袖から現れた守の子分たちが、大きく両手を広げる守へと、嬉しそうに声援を送る。

「さあ! この調子でどんどんと、他の奴等の言葉も邪悪なものに変つ…!」

「待て待て待てえ!」

「ん?」

どこからともなく響いてくる、一際大きなその声に、守の無駄に派手な動きが止まる。

「お前の好き勝手には、させねえぜ! アニキックス!」

「お前たちは…!」

守のその言葉を合図として、ノリのいい曲が、舞台全体に流れる。「キュートな視線に、クツギづけ! 桃色プリティパワー、コトノハピンク!」

「大好物はカレーです! 黄色い閃光ビッリビリパワー、コトノハイ

エロー！」

「漆黒の闇へあなたを誘う…すべてを呑み込む黒色パワー、コトノハブラック…フフフ…」

「時に静かに、時に荒々しく…深き清流、青色パワー、コトノハブルー！」

完璧な台詞回しとポージングで、次々と舞台へと姿を現す七架、保、囁、箆也の四人。背景に流れる曲の効果もあいまってか、観客席の子供たちが目を輝かせ、思わず感動の声を漏らす。

『きゃあああ！神月クン！』

子供たちの感動の声に紛れ響く、女生徒たちの、箆也への歓声。

「あ、アーくんだ！」

四人に続くようにして舞台へと出てきたアヒルの姿に、ウズラが目を輝かせる。

「よ！待ってましたあゝ、アーくうーん！」

抑えきれなかったものを爆発させるように、その場で勢いよく立ち上がったウズラが、八日をかけて作ったという応援幕を勢いよく広げ、アヒルへと大きな声をかける。

「ヘマすんなよぉ」

「四つ目スキャンクに呪われないようにね…」

それぞれに声をかけながらも、スズメとツバメが手を伸ばし、父の応援幕を広げるのを手伝う。

「あいつ等、あれだけ言ったのに…」

父たちの激しい応援に、周囲が少しざわついている中、舞台の上で、思わず表情を引きつり、拳を握り締めるアヒル。

「ガア、台詞！」

「あ、そっか」

舞台袖から紺平に声を掛けられ、アヒルがハツとした表情となつて、改めて真剣な表情を作り、舞台上でアニキたちと向き合う。

「燃える情熱は炎が如く、熱血ハートの赤色パワー、コトノハレ…！」

『うわああああ!』

「へ？」

アヒルが苦勞して覚えた台詞を、何とか詰まらずに発し終えようとしたその瞬間、辺り一帯に響く鬼氣迫った叫び声が、その台詞を、勢いよく掻き消した。観客の皆の視線が、その叫び声の方に動き、舞台上にいたアヒルたちも、戸惑うように動きを止める。

『た、助けてええ!』

アヒルたちが見つめる中、観客席の横の裏道から、必死の表情で飛び出してきたのは、スタッフラしき三名の男であった。皆、汗を流し、何かに追われているのか、後ろを気にしている。

「な、何だ？あ…!」

不思議そうに首を傾げていたアヒルが、逃げて来る男たちのさらに後方から現れる人影に、大きく目を見開く。

「あれは…！綴!？」

スタッフの男たちに続き、裏道から、その場へと姿を見せたのは、先程、想子たちが探していた張本人、アヒルたちのクラスメイトであり、この劇の作家でもある、綴であった。分厚い眼鏡でその表情は見えにくいだが、ゆっくりと歩を進める様子など、綴はどこか、いつもと違う。

「な、なんで綴が…」

「グワアアアア…!!」

「あ…!」

綴の口から放たれる、その重苦しい叫び声に、アヒルが一気に険しい表情となる。

「い、忌…!!？」

綴の背後に見える黒い影を見つけ、アヒルが眉間に皺を寄せる。

「忌…!」

舞台横で見ていた紺平も、アヒルと同じように綴の背後の忌に気付き、厳しい表情となる。

「何よお？小花司つたら今更、出てきて。しかも演出に飽き足らず、飛び入りで出演する気い？」

紺平の横で、忌を知らない想子は、呆れたように口を尖らせている。

「な、なんで綴に忌が…」

「ひええええー！」

「お助けええ！」

舞台上から戸惑うように綴を見ていたアヒルが、綴より少し前にこの場に現れ、今も、舞台のすぐ前を横切るようにして、その場から必死に逃げようとしている、スタッフ三人組を視界に入れ、少し目つきを鋭くし、舞台の上から飛び降りた。

「お前等…！」

『ひい！』

急に目の前へと降り立って来たアヒルに、三人が震えあがり、その場にしゃがみ込む。

「お助けええ！」

「もう二度と、あんなことは言いませんからああ！」

「やっぱりお前等が、綴に何か言ったのか！」

男たちの言葉に、アヒルが自分の考えを確信へと変える。体を屈め、男たちへと顔を近づけるアヒル。

「何だ！？あいつに、何を言った！？」

「ヒーローショーなんて、マジダサいって言いましたあー！」

「ベタな展開で、幼稚園の学芸会の方がマシって言いました！」

「見るに耐えるもん、やれよって言いましたあー！」

すでに追い詰められている状態であるからか、問い詰めるアヒルの形相が恐ろしかったからか、三人は渋ることなく、素直に自分の発した言葉を、アヒルへと答える。

『ごめんなさあーい！』

その目に涙を浮かべ、いつの間にか土下座する格好になりながら、

三人が必死に頭を下げ、謝罪の言葉を何度も何度も口にする。謝らせようとする前に、謝罪の言葉を発した三人に、アヒルが少しホツとしたように肩を落とす。どうやらこの三人に、そこまでの悪気があったわけではないらしい。三人が謝ったことを受け、アヒルがゆっくりと顔を上げ、再び綴の方を見る。

「こいつ等も謝ってることだし、つつ…」

「グアアアア…“破”！」

「んな…!？」

綴を宥めようとアヒルが顔を上げると、綴は、アヒルの前に座り込んでいる三人へと右手を伸ばし、その手から、激しく逆巻く強い衝撃波を放った。

「マジかよ…!」

アヒルが三人の前へと、庇うように立ちはだかりながら、レッドスーツの袖部分に隠し持っていた、真つ赤な言玉を取り出し、右手で強く握り締める。

「五十音、第一音“あ”、解放…!」

右手の中の言玉を、真つ赤な銃の姿へと変え、アヒルがその銃口を、向かってくる衝撃波へと向ける。

「“当たれ”！」

アヒルが銃から赤い光の弾丸を放ち、こちらへと向かって来ている衝撃波を、空高いところへと、勢いよく弾き飛ばす。

「ふう」

間一髪で忌の攻撃を防ぎ、額に浮かんでいた汗を拭うアヒル。

「謝ってんのに、忌が出ないってことは、相当に深い“痛み”を負ってんのか…」

謝罪した三人にも揺るがず、忌をその背に取り憑かせたままの綴を見つめ、分析するように呟きながら、気難しい表情を見せるアヒル。

「んあ？」

その時、アヒルが、自分に注がれる無数の視線を感じ、ゆっくり

とそちらを振り向いた。

「あつ……」

観客席に座った町の者たちが皆、戸惑った様子で、まっすぐに、舞台前に立ったアヒルを見ている。

「銃……？」

「何か、でっかい赤い光が飛び出していったような……」

「つてかさつき、あつちの奴も、衝撃波みたいなの、出さなかったか？」

困惑した様子で、口々に言葉を落とす観客たち。観客たちに綴に憑いた忌は見えていないものの、綴の放った衝撃波や、アヒルが右手に握り締める赤い銃は見えているのだ。

「やっべ、皆が居るの、忘れてた」

皆の視線を一身に浴び、困った表情を見せるアヒル。いくら三人のスタッフを助けるためだったとはいえ、これだけ大勢の人の前で言葉の力を使ってしまつては、言い訳のしようもない。

「ど、どうしたら……」

「よく、一般市民を守った。さすがは我らがコトノハレンジャーのリーダー、コトノハレッドだ」

「へ？」

焦っていたアヒルの方へと、舞台の上から降り注がれる声。

「か、箆也……！」

舞台の上から、まるで台詞のような言い回しで言葉を放ったのは、箆也であった。箆也は、忌に取り憑かれた綴を見つめ、鋭い表情を見せている。

「あれこそが、邪悪言語団のボス、ジャーアック。我らが倒すべき、最後の敵だ」

「へ？」

綴を見つめながら、そう言い放つ箆也に、アヒルが戸惑うように目を丸くする。

「ジャー、アック？」

「そう…アニキックスなんて、ジャーアックのものすつごく下のしもべに過ぎないわ…フフフ…」

「え！？俺、しもべ！？でも真田さんがそう言うなら、それでいいですー！」

急に作られた設定に不満を感じながらも、囁の言葉のため、大人しく納得する守。

「ついにここまで来たんだね、私たち」

「さあ、戦いましょう！アヒ…じゃなくて、コトノハレッドさん！」

「お前等…」

話を合わせる七架や保に、アヒルが少し目を細める。

「あ、何だ。劇の演出だったのか」

「結構、本格的な仕掛けとか、してあんだなあ」

箆也たちの言葉を聞いた観客が、上手く、忌とアヒルの交戦も劇の一部と思いこんでくれたようで、納得したように頷く。観客たちから戸惑いの色が消え、アヒルがホッとしたように肩を落とす。

「よっしゃあ！すべての人の言葉を守るため、今日も言葉の力で戦うぜえ！コトノハレンジャー！」

アヒルは再び舞台上へと飛び上がり、劇の中の台詞を放って、忌に憑かれた綴と向き合った。

「忌退治をそのまま、劇にしてしまう気ですか…」

観客席で舞台を見守る雅が、少し眉をひそめ、不安げに呟く。

「手を貸さなくていいんですかあゝ？先生っ」

雅の横に座った為介が、すぐ傍に立つ恵の方を振り向き、どこか楽しんでいるような笑顔で問いかける。為介のその言葉に、恵は固く腕を組んだまま、そっと目を細めた。

「これは、“一年D組の生徒による”劇だ」

「成程」

恵のその言葉に、為介は納得するように頷いた。



あノ夏ノ日。 (4)

「グウウウウウ…」

「……………」

コトノハレンジャーの格好で、舞台の上に立ったまま、忌に取り憑かれた綴と向き合う、アヒルたち安団。

「安二木」

「ああ？」

アヒルが、同じく舞台に立ったままの、アニキックスの格好をした守を呼ぶ。

「観客の皆を守つていてくれ。万が一、攻撃が飛んでも大丈夫なように」

「そりゃ、いいけどよぉ」

頷きながらも、守が眉をひそめる。

「それなら、逃がした方が安全じゃねえか？子供だって、たくさん居るわけだし」

「……………」

「朝比奈？」

守の提案に答えようとせず、ただ気難しい表情で、まっすぐに綴を見つめているアヒルを見て、守が首を傾げる。

「観客を逃がし、このまま劇を終わらせてしまつては、小花司の痛みは、拭えなくなるのではないか」

横から入って来る声に、アヒルと守が同時に振り向く。

「簞也」

「そう考えているのだろうか？」

アヒルの考えなど、見通しているように言い放つ簞也に、アヒルが口元を緩め、そつと笑みを浮かべる。

「ああ、よくわかったな。さっすが、俺の神附き」

「当然だ」

微笑むアヒルに、箆也が得意げに答える。

「それくらい、私だつてわかつてたわよ…」

「わ、私もだよ！」

「何をムキになっている」

少しケンカ腰に、口々に主張する囁と七架に、箆也が呆れたように表情をしかめる。

「すみません！俺、全然わかりませんでしたあー！」

「あなたには、何も期待していない」

大声で謝る保に、冷たく言い放つ箆也。

「そういうことなら、仕方ねえなあ。おい、お前等！」

納得するように頷いた守が、傍に立っている子分たちの方を振り向く。

「お前等の出番は終わりだつてよ。先に舞台袖に下がつとけ」

『はい、アニキ！』

守の言葉に素直に頷き、子分達は皆、足早に舞台袖へと下がっていった。アヒルたち五人を舞台に残し、守が舞台を降りて、観客席のすぐ前へと立つ。

「五十音、三十一音“ま”、解放！」

右手に握り締めた言玉を、自身の文字を解放し、二つの円月輪へと変える守。両手に構えた円月輪を、空へと高々と放り投げ、守が大きく口を開く。

「<sup>まも</sup>守れ”！”」

円月輪が空を舞うと、舞台と舞台袖、そして観客席を遮るようにして、薄い赤色の光の膜が張られる。張られていく膜を、観客たちは、興味深く見つめていた。

「よおおーし、これで粗方の攻撃はっ…」

「ねえねえ」

「あ？」

円月輪を手元に戻し、自らが張った膜を見上げ、満足げに頷いていた守が、後方の観客席の方から、可愛い声に呼ばれ、振り返る。

守が振り返ると、まだ幼い二人の子供が、黒目ばかりの瞳をまつすぐに、守へと向けていた。

「アニキツクスは、わるいやつじゃないの？」

「なんで、コトノハレツドのいうこと、きいてるの？」

「へ！？あ、ええーつと、それはあ」

子供たちからの素朴な疑問に、焦るように表情をしかめながら、守が考えを巡らせる。

「心を入れ換えたんだよお！悪い奴だつて、反省して、イイ奴になつたりするんだぞお！？」

『ふうーん』

必死に言葉を紡ぎ、何とか子供たちを納得させる守であつた。

「“包め”……」

「ん？」

静かに言葉を発し、守の張った膜に被せるようにして、目には見えないほどの薄い、金色の結界を張るツバメに気付き、スズメが振り向く。

「二重にしたのか？」

「一応ね……安二木くんの力だけじゃ、何か頼りないし……」

「ま、そりゃ言えてるな」

ツバメの言葉に、納得するように頷くスズメ。勿論、守本人には聞こえているはずもないが、相当に酷い発言をしている。

「それで……？アヒルくんたちの手助け、するの……？」

「んんー、別にしないでいいんじゃない？」

問いかけるツバメに、どこか適当な口調で答えるスズメ。

「なんせ」

スズメが言葉を続けながら、ゆっくりと視線を動かしていく。

「アーくうーん、頑張つてええー！」

「親父、盛り上がってるし」

「そうだね……」

応援幕を振り上げ、舞台上のアヒルへと声援を送る父に呆れつつ、頷き合うスズメとツバメであった。

「第六音“か”、解放」

「第十一音“さ”、解放…」

「第十六音“た”、解放！」

「第二十一音“な”、解放…！」

箆也たち四人が、言玉を解放し、それぞれの武器を構える。一瞬で言玉から武器へと姿を変えさせ、見たこともない武器を勇ましく身構える四人に、観客席からは、感動の声が漏れる。

「ナナってば、薙刀なんて持ちちゃって。すっごい演出ねえ」

真つ赤な薙刀を構えた親友の姿に、舞台袖で見つめる想子が、観客たち同様、感心した様子で言う。

「あいつ等、いつの間に、こんな演出作ってたのかしらあ？練習じや、一度もやってなかったのに」

「そうだね。ハハハ…」

事情を知る紺平は、感心する想子の横で、乾いた笑みを浮かべている。

「ってか、監督の私に内緒って、どういうこと!？」

「さ、さあ？」

「まったく！終わったら、文句言ってやるんだから！」

「そうだね。アハハ…」

想子の言葉に頷きながら、今は、この劇が無事に終わることを願う紺平であった。

「言玉を解放はしたものの、あれでは攻撃出来ないな」

「ああ。何とかして、忌を綴から切り離さねえと」

互いに武器を構えたアヒルと箆也が、まっすぐに綴を見つめながら、観客に聞こえないように、静かに言葉を交わす。忌が綴に取り

憑いている状態で、忌を攻撃すれば、綴の体まで傷つけることになつてしまう。それを、アヒルは避けたかった。

「もう一度、彼等に謝ってもらう…？」

『ひい！！ごめんなさあ！！』

囁が舞台の上から、舞台前に座り込んだままのスタッフの男たちへと、鋭い視線を送る。すぐにその視線を感じ取り、男たちはまた、深く頭を下げ、謝罪の言葉を叫ぶ。必死な叫びは十分に、心からの謝罪に聞こえるが、だがやはり、綴の中から忌は出ていかない。

「やはり、反応はないな」

「じゃあ彼等は用済みね…リーゼントくん、回収しておいて…」

「はいはい、真田さあくん！」

囁の言葉に大きく頷き、守が、綴を傷つけた三人を、守の張った膜の中へと引き込む。

「謝られても忌が出ないとは、小花司の傷は、相当に深いようだな」

「ああ。けど、何とかしねえと…」

「グウウウウウ…“砕”！」

『あ…！』

アヒルたちが、何とかして綴から忌を切り離す策を考えているその時、綴が舞台上に居るアヒルたちへと右手を向け、言葉を発し、また強い衝撃波を放つ。

「“<sup>あ</sup>上<sup>あ</sup>がれ”！」

「“<sup>たか</sup>高<sup>たか</sup>くなれ”！」

向かって来た衝撃波に対し、アヒルは自身へと銃口を向け、言葉により飛び上がり、保も言葉により、糸を広げ、他の三人を連れるようにして、空中へと舞い上がる。衝撃波は誰も居なくなった舞台を直撃し、特設ステージは粉々に崩れ落ちた。

「え、演出にしても、ちょっとやり過ぎじゃない…？」

崩れ落ちた特設ステージに、思わず引きつった表情を見せる想子。  
「ガア…」

飛び上がったアヒルたちを見上げ、紺平が不安げな表情を見せる。

「助かったわ…転校生くん…」

「ありがとう、高市くん」

保の赤い糸に引つ張られるようにして、空中へと移動し、衝撃波を避けることの出来た囁と七架が、保へと笑顔を向ける。

「ふわぁー！こんな情けなさ全開の俺が、一丁前に、皆さんを助けちゃってすみませえーん！」

「こんな奴に助けられるなど、一生の不覚だ」

「残念だったわね…フフフ…」

同じように保に助けられ、悔いたような表情を見せている籠也に、囁がそつと微笑みかける。

「お前等、大丈夫か！？」

四人とは別に、空中に飛び上がっていたアヒルが、空を移動し、皆のもとへとやって来る。

「すみません、アヒルさん！こんな普通の名前の俺が、おもしろ名前のアヒルさんを差し置いて、皆さんを助けてしまつてえ！」

「ケンカ、売ってんのか…？」

保のその言葉に、アヒルが思わず表情を引きつる。

「つて、おい！」

その時、アヒルの視界に、保の後方から、電柱のような照明器具が、特設ステージが崩れたことにより、ゆっくりと保の方へと倒れていつている様子が入った。気付いていない様子で、首を傾げる保に、アヒルが焦りの表情を見せる。

「保、危ねえ！後ろ！」

「へ？」

アヒルが必死に声を張り上げるが、保が振り返った時には、照明器具は、もう避けられないところまで傾いてきていた。

「ふ、ふわああああー！」

「保…！」

「高市くん！」

傾いた照明器具に巻き込まれるようにして、保が、崩れた舞台上へと、勢いよく落下していく。アヒルや七架が不安げに見下ろす中、保は胸から思いきり、舞台の上へと落ちた。

「痛たたたたあゝ」

打ちつけた胸を押さえ、痛みに表情を引きつりながら、保が上半身をゆつくりと起こす。

「“痛い”なあ。本当に…ん？」

感じる痛みに、保が思わず言葉を漏らしたその時、保の意識が、霧にでも覆い尽くされていくかのように、霞がかっていく。

「これは…」

「避ける、保！」

「へ？」

上から降り注ぐアヒルの声に、自身の意識に戸惑っていた保が、顔を上げる。

「あ…！」

傾いていた照明器具が、完全に下方から崩れ落ち、舞台の上に居る保の真上へと、落ちて来ようとしていた。迫り来る照明器具に、保が大きく目を見開く。

「クソ…！」

空中を舞うアヒルが、保へと落ちていく照明器具へと銃口を向ける。

「……っ」

アヒルが銃口を向ける中、保は焦りの叫び声をあげることなく、静かにその場で俯いた。

「第二十六音“は”、解放…」

「え…？」

耳に届くその言葉に、アヒルが思わず、引き金を引こうとしていた手を止める。黒い光に包まれ、舞台の上で、保が俯いたまま、ゆつくりと立ち上がる。

「果<sup>は</sup>てろ」

保が顔を上げたその瞬間、その姿は、保から灰示へと変わった。灰示は素早く赤い針を投げつけ、落ちてきた照明器具を破壊する。

「んな！？は、灰示いい！？」

「また、ややこしい時に、ややこしい奴が出て来たな」

現れた灰示に、目を見開き、驚くアヒルの横で、箆也が少し、困ったように肩を落とす。

「誰？」

「誰だ？」

「パパあゝ、あの人、だれえゝ？」

「誰…？」

突然、保から姿を変え、舞台へと現れた灰示に、観客席から、疑問の声が飛ぶ。その声が耳に入り、灰示はゆつくりと、観客席の方を振り向いた。

「くだらない、問いかけだね…」

灰示は皆の問いには答えず、そつと、冷たい笑みを浮かべる。

「誰かわかんないけど、カッコいい」

『うんうん！』

微笑んだ灰示に見惚れるように、呟く女生徒と、大きく頷くその他の多くの女生徒。

「この“痛み”を生んだのは、君かい…？」

灰示が観客席から視線を動かし、忌に取り憑かれている綴の方を見る。ゆつくりと問いかけ、新たな針を身構えた右手を振り上げる灰示。

「君にも贈ろう、この“痛み”を…」  
「げ！」

灰示の言葉を聞いたアヒルが、焦りの声をあげ、慌てて舞台上へと降りていく。

「待て待て待て！」

アヒルが、針を身構え、今にも綴を攻撃しそうな灰示の前、立ち

はだかるようにして降り立つ。

「待てよ、灰示！」

『ハイジ？』

「あっ」

アヒルが思わず名を呼ぶが、アヒルが呼んだその名に、観客たちの疑問が集まる。

「あ、ああ、待つんだ、コトノハグレイ！」

「は？」

アヒルが呼んだその名に、灰示が眉をひそめる。

「前からおかしいとは思っていたけど、ついにトチ狂ったのかい…？ 安の神様」

「うつせえ！ てめえが勝手に出て来たんだから、こっちの設定くらい、守りやがれ！」

冷たい視線を投げかける灰示に、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「彼の名はコトノハグレイ…気まぐれに私たちの前に現れる、敵が味方もわからない、六人目のコトノハレンジャーよ…」

『へええ』

いつの間にか舞台上へと降りてきた囁の解説により、観客たちが納得するように頷く。その囁の言葉を聞き、灰示は不満げに表情をしかめた。

「やれやれ…僕がこんな、くだらないことに巻き込まれるなんてね

…」

「勝手に出て来た、お前が悪いんだろ」

「まあいいよ…」

諦めるように肩を落として、灰示が再び、綴の方へと視線を移す。

「僕はただ、無意味な“痛み”を消すだけ…」

「ググ…」

同じ忌である灰示の、鋭い視線を浴びて、綴に取り憑いた忌が、少し怯んだような声を漏らす。

「だから待てっ！」

灰示の前へとさらに足を踏み込み、綴を見つめる灰示の視線を遮るアヒル。

「今、お前が攻撃したら、綴まで、忌に取り憑かれてる人間まで、傷つけちまうだろうが！」

「相変わらず、そんなくだらないことを、気にしているのかい…？」

アヒルの主張を聞き、灰示が少し呆れたように眉をひそめる。

「誰一人傷つけずに、ただ“痛み”だけを消し去るなんて、そんなのは理想論に過ぎないよ…安の神様」

「それでも、俺は」

まっすぐな曇りのない瞳で、アヒルが灰示を見つめる。

「それでも俺は、誰も傷つけずにいたい」

アヒルの、思いの詰まった、その迷いのない言葉を真正面から受け、灰示が、感情の見えない表情で、ただ、目だけを細める。二人の間で、しばらくの間、沈黙が続くと、灰示は不意に体の向きを変え、アヒルと綴に背を向けた。

「君にヒントをあげるよ、安の神様」

「ヒント？」

背を向けたままの灰示の言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「彼の父親は、かつて、ヒーローショーの演者だった」

灰示が首だけを動かし、その視線を、綴へと向ける。

「綴の、父親が？」

「幼い頃から、父親の舞台を見に行っていた彼は、父の勇ましい姿に憧れ、そして、夢を抱いた」

アヒルが戸惑いの表情を見せる中、灰示の言葉が続く。

「“いつか、父のように自分も、ヒーローショーを作りたい”とね」

灰示の言葉を聞き、アヒルがハツとした表情を見せる。

———すべての人の心を揺さぶるもの！それこそがヒーローショーだからだよ！———

綴の言葉を思い出し、少し考え込むように俯くアヒル。単純なものかと思っていたが、綴のヒーローショーへのこだわりは強く、そして、深いものだったのだ。だからこそ、それを否定された綴の痛みも、深いものとなってしまった。

「そういうことか…」

「まあ、僕には関係ないけどね…」

灰示がまた綴から視線を逸らし、アヒルに完全に背を向ける。

「精々、頑張るといいよ。安の神様」

口元だけをそつと微笑ませ、灰示の体がまた、黒い光へと包まれていく。アヒルが呼び止める間もなく、灰示の気配は、その場から掻き消えていった。

「あ、れえ〜？俺、どうしたんでしたっけえ？」

次の瞬間、その場には、大きく首を傾げた保の姿が現れる。

「ヒントって、朝比奈くんが小花司くんを助けるためのヒントって、受け取り方でいいのかな？」

「相変わらず、わからない男だ」

皆から遅れるようにして、空中から降りてきた七架と籠也が、少し呆れたように言葉を交わす。

## あノ夏ノ日。 (5)

「父親への憧れ…綴…」

アヒルが体の向きを変え、ゆっくりと、こちらへ向かって歩き出して来ている綴と、真正面から向き合う。

「お前も、面白くないと思っっているのだろう…?」

綴の口から零れ落ちる、忌のものであるう、重苦しい声。だが、それは、綴の心の痛みを現す、言葉でもあった。

「僕の書いた話など、つまらないものだ、くだらないものだ、そう、思っているのだろう…?」

綴からの言葉を、まっすぐに受け止め、アヒルがそっと、目を細める。

「俺、正直、最初は、ヒーローショーの劇をやるなんて、ガキ臭いし、恥ずかしいし、マジ御免だっ、そう思ってた」

紡がれるアヒルの言葉に、綴が、舞台のすぐ横辺りまでやって来たところで、足を止める。立ち止まった綴を見つめながら、アヒルが、誰からもわかるほどに、素直な言葉を向ける。

「けど、実際やってみると、何かだんだん、楽しくなってきた」

アヒルが少し口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべる。

「こうやって、仲間や、安二木どもや、クラスの皆や、お前と、一つのものを作っていくことが、本当に楽しくなってきた」

皆の姿を確認するように、周囲を見回すアヒル。アヒルからの視線を受け、舞台上に立つ筆也たちも笑みを浮かべ、その言葉に同意するように、大きく頷く。

「今は、こうして、ヒーローショーをやれて、本当に良かったって、そう思ってる」

「そんな言葉…!」

再びアヒルの笑顔が向けられると、綴は、大きく声を荒げた。

「お前もどうせ、ベタな展開だと思っっているのだろう!?!幼稚園の

学芸会だと！」

「ああ、それは確かに思ってるかもなあ」

「おいおい、朝比奈！」

あっさりと頷くアヒルに、観客席の前に立つ守が、思わず焦ったように声をあげる。だが声をあげたのは守だけで、箆也たちは、落ち着いた様子で、アヒルの言葉を見守っていた。

「でもベタな展開って、要は、ずっと親しまれてきた、誰からも求められてる展開ってことだろ？」

さらに微笑み、問いかけるアヒルに、綴の虚ろな瞳が、風に吹かれるように揺れ動く。

「それって俺は、凄いいことだと思う」

大きく頷いたアヒルが、またまっすぐに、綴を見つめる。

「夏のこのクソ暑い中、毎日毎日練習してきて、何度も何度も台詞読んで、そんで一つ、知ったことがある」

綴はその動きを止めたまま、静かに、アヒルの言葉に聞き入る。

「お前の言った通りだ、綴」

確信を持って、紡がれる言葉。

「誰の心も揺さぶるもの、それがヒーローショーだ！」

「……！」

はつきりと放たれる言葉に、大きく見開かれる綴の瞳。

「う、うううう……！うあああああ！あつ……」

激しく苦しむように頭を抱え、その身を揺さぶった綴が、一際、大きな叫び声を放ったと共に、力なくその場に倒れ込む。

<グ、グググ……！>

「出た……！」

綴の体から飛び出し、上空へと舞い上がった黒い影の姿を捉え、アヒルが鋭い表情を見せる。

「奈々瀬、綴を頼む！」

「うん……！」

アヒルの指示を受けた七架が、舞台を飛び降り、倒れた綴のもと

へと、駆け出していく。

「あいつの“痛み”を救ったか。さすがだな」

綴から出た忌を見上げ、恵がどこか、満足げに微笑む。

「どうなつてんだあ？最後の敵の奴、いきなり倒れちゃったぞお？」

「よくわかんないけど、これで終わりなのお？」

「えええゝそんなの、つまんなあゝい」

突然、倒れ込んだ綴に、次々と困惑の声を発する観客たち。一般の観客たちには勿論、忌の姿など見えていないため、ただ、綴が急に倒れたという認識しか残らないだろう。

「劇を成功させるためには、一演出いるねえゝ雅くん」

「はい」

為介の言葉に頷き、雅が制服の胸ポケットから、自身の青色の言玉を取り出し、空へと飛び出した忌に向け、それを掲げる。

「“見<sup>み</sup>えろ”」

雅の口から、静かに放たれる言葉。

『あ…！』

青い光が空へと放たれると、次の瞬間、観客たちの視界に、忌が映し出された。

<お、おのれ！忌々しい音士共が…！>

焦ったような声をあげ、空で揺らめきながら、黒い影が、舞台上にいるアヒルたちへと、その黒い手を伸ばす。

<死ね！“破<sup>ハ</sup>”…！>

アヒルたちへ向け、放たれる衝撃波。囁が素早く横笛を構え、美しい音色を奏でる。

「“妨<sup>さまた</sup>げろ”」

赤い光の膜を張り巡らせ、忌から向けられた衝撃波を受け止める囁。

<ク、クソ…！もう一度…！>

「“薙<sup>な</sup>ぎ払え”！」

<ううう…！>

囁に攻撃を防がれ、もう一度、衝撃波を放とうと手を伸ばした忌であつたが、突然、後方から飛んできた赤色の一闪に邪魔される。忌が後方を振り返ると、そこには、倒れた綴の介抱をしながらも、鋭く薙刀を身構えた七架の姿があつた。

「“高<sup>たか</sup>くなれ”！」

<何…！？>

言葉と共に、保が操作した赤い糸に引き上げられ、一気に忌の居る上空へと舞い上がっていく簞也。忌が焦りの声をあげる中、簞也が真つ赤な鎌を振り下ろす。

「“刈<sup>か</sup>れ”…！」

<ギヤアアア！>

簞也の鎌に正面から斬り裂かれ、忌が激しい悲鳴をあげながら、後方へと吹き飛んでいく。

「今だ！」

さらに上空を見上げ、簞也が鋭く叫びあげる。

「か…！いや」

簞也が、いつものように“神”と呼ばうとした、その声を止め、改めて、大きく口を開く。

「コトノハレッド！」

「ああ！」

簞也の見上げる、さらに上空に、いつの間にか移動していたアヒルは、簞也の呼びかけに大きく頷き、簞也の攻撃により、吹き飛んでいる最中の忌へと、その銃口を向けた。

「これで終わりだ、ジャーアック！」

勇ましく叫び、アヒルが引き金を引く。

「“当<sup>あ</sup>たれ”…！」

アヒルの言葉と共に、銃口から、忌へと、まっすぐに放たれる、巨大な赤色の弾丸。

<グ…グアアアアア！>

避ける術も、防ぐ術もなく、忌は、アヒルの真つ赤な弾丸を正面から食らい、あっという間に、青い空の中へと、掻き消えていった。静かになった舞台の上へと、アヒルと、それに続くようにして籠也が、ゆっくりと降り立つ。

「こうして、コトノハレンジャーにより、邪悪言語団のジャーアツクは倒され、人々の言葉に、平和が戻って来たのでした！」

絶妙なタイミングで、舞台の袖から、紺平がマイクを使い、アナウンスを響かせる。

『うわああああ！』

紺平のアナウンスが終わったその瞬間、観客たちは皆、立ち上がり、大きくその両手を叩いて、舞台上にいるアヒルたちへと歓声を送った。

「凄い！凄かった！」

「いつもの催しものの、軽く数千倍はいい出来だった！」

「コトノハレンジャー、カッコいいー！」

観客たちから、次々に寄せられる言葉。その言葉を耳に入れ、アヒルと籠也は笑顔で目を合わせ、握り締めた拳を、軽くぶつけ合った。

「はあー！こんな今までの人生で、拍手を浴びたこともない俺が、一丁前に、皆さんから歓声なんて頂いてしまつて、すみませえーん！」

「フフフ…嬉しそうね…」

謝り散らしながらも、大きな笑顔を見せている保を見て、囁が不気味に微笑む。

「もう、アーくん、サイコー！さっすがお父さんの息子だよー！」

「うつせえなあ、もう」

「テンションマックスだね…」

応援幕を振り上げ、誰にも負けないほどに大きな叫び声をあげている父を、スズメとツバメが、呆れたように見つめる。

「ん、ん…」

皆の大きな歓声が、その耳に届いたのか、地面へと倒れ込んでいた綴が、眼鏡の奥でゆっくりと、その瞳を開く。

「僕、は…」

「気が付いた？」

「奈々瀬、くん…？」

すぐ横に座り、優しく問いかける七架に戸惑いながら、綴がゆっくりと、倒れていた上半身を起こす。意識は少し朦朧としており、体も節々が痛い。今の状況がわからず、綴は少し困惑した様子で、首を傾げた。

「僕は、一体…」

「皆さんに紹介します！」

戸惑うように落とされた綴の声を遮るようにして、舞台上のアヒルが、大きく言葉を放つ。

「この劇の脚本兼演出を手掛けた、俺たちのクラスメイト、小花司綴です！」

「え…？」

舞台上のアヒルが、舞台横で座ったままの綴へと、その手を伸ばす。アヒルの紹介を受け、観客たちの視線が、一気に綴へと集まった。注がれる視線に、意識は、はつきりしたものの、綴は困ったように、眉をひそめる。

「え、えつと…」

「凄い面白かったぞ、兄ちゃん！」

「わくわくした！たのしかったよ！」

「演出も凄かったし、最高だった！」

「えっ…」

次々と向けられる賞賛の言葉に、綴が驚いたように、その瞳を見開く。大人も子供も、皆が大きな笑顔で、綴を見ている。特に子供の表情は、憧れにも尊敬にも似たものだ。そんな子供たちの表情は、

綴に、かつての自分の姿を思い出させた。

—— お父さん、今日もすごくカッコ良かったよ！——  
—— ありがとう、綴——

「お、父さん……」

送られる拍手と、賞賛の声に、幼い頃、誰よりも憧れた父の立っていたあの舞台に、少し近づけたような気がして、綴がそっと、目を細める。

「舞台へ上がって来いよ、綴！」

舞台の上から、アヒルが手を振り上げ、綴を呼ぶ。その声に、綴は大きく、笑みを浮かべた。

「ああ……！」

アヒルの言葉に頷いて、綴は、舞台の上へと駆け出していった。

こうして、夏の最後の納涼祭は、賑やかに、その幕を閉じた。

九月。二学期、始業式。言ノ葉高校、一年D組。

「ああー、皆に一つ、知らせがある」

今学期、初のホームルーム。教壇に立った恵は、相変わらずやる気のない様子で、席に座る生徒たちへと言葉を向けた。

「納涼祭の劇、あれは大評判だったわけだが、過度の演出で、特設ステージをぶっ壊すということをしてしまった」

突然、忌が現れたことにより、劇を中断せずに交戦をしたため、特設ステージは完全に崩れ落ちてしまったのである。囁の言葉による操作のお陰で、皆、劇の過度の演出ということで信じ切っているが、劇の演出にしまったために、特設ステージを、言葉の力により、元に戻すことは出来なかったのだ。

「その代償として、クソ面倒臭いことに、これから一ヶ月、我らが一年D組は、町の掃除をやらされることとなった」

『えええ〜!?!』

恵の言葉を受け、生徒たちが一斉に不満の声を漏らす。

「文句言つてんじゃねえ!こっちは、残業代も出ないんだぞ!?!」

「すっごい私情、挟むな」

誰よりも不満げに怒鳴りあげる恵に、アヒルが呆れた表情で肩を落とす。

「まあ仕方ないよね」

「そうだなあ」

後ろから話しかけてくる紺平の言葉に、アヒルが大きく頷く。忌を退治し、劇も無事、成功させたのだ。掃除くらいで済んだのなら、儲けものであるう。

「掃除してたら、また、あの人に会えるかしらあ〜?」

「そうよねえ〜」

「あの人?」

女生徒たちから漏れる、うっとりとしたその声に、七架が戸惑うように首を傾げる。

「あの人って?」

『勿論、コトノハグレイ様よ!』

「え…?」

声を揃える女生徒たちに、七架が思わず固まる。劇の最中、一瞬だけ現れた灰示に、多くの女生徒が、すっかり虜になってしまったようである。

「しばらく灰示には、なんなよお。保」

「へ?」

忠告のようなアヒルの言葉に、保が不思議そうに首を傾げる。

「朝比奈君!」

「ああ?」

教室がそれぞれに騒々しくなり始めると、突然、教室の後方の席

から立ち上がった綴が、足早にアヒルの席へと歩み寄って来た。

「どうした？綴」

「実はね…」

問いかけるアヒルに答えながら、綴がどこか、得意げな笑みを浮かべる。

「納涼祭の大好評を受け、続編を書いてみたんだよ！“コトノハレンジャー、パートツー”！」

「え…？」

アヒルの前へと、分厚い台本を突き出す綴に、アヒルが思わず、表情を引きつる。

「主役は勿論、ワンに引き続き、コトノハレッドだ！やってくれるよね！？朝比奈君！」

「んな…！」

綴の言葉に、大きく歪む、アヒルの表情。

「だ、誰がやるかあああ…！」

新学期の教室に、アヒルの怒鳴り声が、響き渡った。

あノ、夏ノ日。

T h e      E N D .

あノ夏ノ日。 (5) (後書き)

いかがでしたでしょうか、「あノ夏ノ日」。

「あノ神ハキミ。」に関しては、まだいくつか、書きたいなと思っている話があるので、いずれ書くかも知れませんが、アヒルたち、安団のお話を書くのは、これが最後になると思います。

今まで約2年ほど、本当に楽しんで、書くことが出来ました。

淋しくはなりますが、また新たなお話に向かって、進んでいければ  
思っております。

ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました。  
では。

千風

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6878r/>

---

Out Of Word. あノ夏ノ日

2011年3月17日14時55分発行